

第二言語習得論に基づく効果的な文法指導

—教室で使えるコミュニカティブな文法練習—

大場 貴志

1. はじめに

英語教育において、文法の構造や知識を理解することは重要であり、多くの文法書が出版され続けている。しかし、文法の知識を学び理解するだけでは、運用できるようになるためには十分とはいえない。英語を使える人材を育成するうえで、運用可能な英文法を習得させるためにはどう指導したらいいかはこれまであまり議論されてこなかった。本稿では、筆者が専門とする第二言語習得論 (Second Language Acquisition) 研究を基に、文法指導に関連する理論や実証研究を概観し、教室で効果的な文法指導を行ううえでの重要なポイントを提示したい。特に、文法をどのように練習させるかという点に焦点をあて、練習が必要な理由、背景理論、さらには具体的な練習メニューを提示したい。これまで練習は機会的なドリルなどのイメージが強かったと思われる。第二言語習得研究でも、練習を指導にどう組み込むかの議論は十分されてきておらず、今後も実証研究が必要な分野である。使える文法を身につけるためにどのように指導していけばいいのかを本稿では検討していきたい。

2. 第二言語習得論における文法指導

第二言語習得研究において、理解可能なインプット (comprehensible input) を大量に与えることの重要性を否定するものはないであろう。しかし、カナダのイマージョン教育などでの研究が示すように、理解可能なインプットだけでは文法の正確な運用においては十分ではないという結果が報告されている。

そこで、Spada らの研究者は、コミュニケーション活動の前後または活動中に、学習者を明示的にまたは暗示的に、特定の文法 (形式) に注意を向けさせる言語形式重視指導 (Form-Focused Instruction: FFI) を体系化させ、多くの実証研究でその効果が報告されている。

図1で示されているように、言語形式重視指導法 (FFI) は、学習者の注意を文法 (形式) にどの程度明示的に向けさせるかを指導者が選択することが可能である。近年日本でも認知され始めた「フォーカス・オン・フォーム」は、自然なコミュニケーションの文脈で付随的 (暗示的) に文法を学ぶという指導法であるが、学習者のレベルや文法項目の複雑さによっては、学習者は形式について十分気づくことができず、形式との出会う回数も1~2回では運用レベルまで文法知識が成熟することは難しいという問題もある。

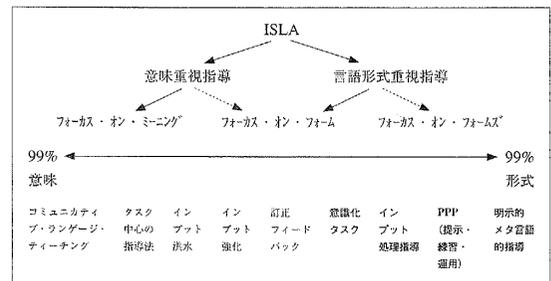


図1 形式に焦点を当てた ISLA 指導法の分類

(出典: Loewen, S. (2022))

この問題点を解消するため、「フォーカス・オン・フォームズ」の要素も組み込み、特定の文法項目をより明示的に提示 (説明) したり、言語活動で使わせたりするような指導を組み込ませることで柔軟な指導が可能になるのが FFI である。ただし、メタ言語 (文法用語) を含んだ指導を行うにしても、文脈 (コンテキスト) がないような明示的な指導では不十分である。例文、ダイアログ、文章など文法が使われている場面を提示することが前提であることを忘れてはならない。

重要なことは、明示的にしろ、暗示的にしろ、文脈の中で文法を理解させ、運用させるような言語活動を仕掛けていくことであり、学習者の理解度に応

じて明示的な説明や口頭フィードバックを行ったり、文法の形式が複雑であるため、暗示的なアプローチだけでは理解させるのに十分でないと判断すれば、明示的な説明を組み入れたりすることも可能であろう。暗示的指導と明示的指導のどちらか一方に偏りすぎる極端な指導になることは避けたほうがよいだろう。

3. 効果的な「練習」とは

以上のように、FFIの枠組みを用いれば、学習者や教材の種類、文法項目に応じて柔軟に文法指導を行うことが可能である。しかし、文法を運用できるようにするレベルまで持っていくには、文脈の中で一度や二度文法項目に出会わせ、気づかせ、理解させるだけでは十分ではない。筆者が中学校教員として教え始めた2001年は、文法を帰納的に導入して生徒に気づかせることに重きを置いていたような風潮があった。しかし、理解して気づくだけでは、質の高いアウトプットをさせるには十分ではなく、実際に使わせる「練習」(practice)が不可欠だ。

この点に関して、DeKeyser(2015)らが提唱する「技能習得理論」(Skill acquisition theory)では、大量の練習を繰り返すことで、理解しているレベルの宣言的知識(declarative knowledge)が実際に運用できるようなレベルの手続き的知識(procedural knowledge)に変容し、やがて知識は成熟し、自動化(automatization)し、意識しなくとも運用できるようになっていくとしている。日本のような、英語を日常生活では用いないEFL(English as a Foreign Language)の環境下では、インプット量や練習量が不足するため、中高の教室の指導だけで知識が自動化する段階に到達させるのは非常に困難である。しかし、理解のレベルで止まらず、多少意識して、エラーが起こっても使える(アウトプットできる)という段階に少しでも持っていくことは必要である。そのためにも、限られた時間で、いかに良質の練習を多く行うかが重要になる。

それでは、どのように練習させたらいいのか。この点に第二言語習得研究ではまだそこまで具体的に示していないように思われる。「繰り返すこと」(repetition)の重要性は研究でも報告されているが、従来のように、4択などのドリル問題を大量に解くことや、教師のあとに続いて繰り返し言うミムメモ

的な練習、さらに音読など、繰り返すことは実際教室では行われてきた。しかし、そのような文脈がなく、何のために繰り返しているのか目的がはっきりしていない練習を繰り返してきたケースが多いのではないだろうか。認知科学の転移適切性処理(Transfer appropriate processing)という理論は、練習場面と実際の使用場面が同じような形式のときに、学習者のパフォーマンスが最大限発揮されるとしている(Lightbown, 2013)。つまり、ゴールがコミュニケーションをすること(使うこと)であれば、それに類似した形式の練習を行う必要があり、闇雲に機械的なドリル練習や音読を繰り返しても、英語を使えるようになるための最適な練習とは言えないのである。

以上のように、文法知識を使えるようにするためには、文脈の中で、繰り返し練習することが必要である。文法を明示的に説明したり、意識高揚活動などで気づきや意識を高めたりするだけでなく、ペアやグループなどで、コミュニケーションの場面を想定し、文法を繰り返し使わせていく必要がある。SpadaやLightbownらの研究者たちは最適な練習の条件として、“meaningful”かつ“thoughtful and effortful”なものが望ましいとしている。さらに特定の言語形式を意図的に使用させるコミュニケーションな言語活動を肯定し、推奨している。実際、EFL環境下においては、特に学校教育においては、様々なコミュニケーションの場面を想定し、特定の言語形式を用いるような場面の練習も有意義であろう。その積み重ねをしたうえで、教科書の単元末に、自由度が高い言語活動(スピーチやディスカッションなど)を行うことで、練習させてきた既習事項を別の文脈で使わせる機会を与えることが必要であろう。

4. 文法指導実践例

以上の議論をもとに、教室で文法を指導する際の具体的なアイデアを紹介する。英文法指導の流れとして、以下のような手順で行うとする。

- (1) 口頭導入(oral introduction)
- (2) 口頭ドリル+明示的説明(必要に応じて)
- (3) 文法練習(form-focused practice)
- (4) 言語活動(communicative activity)

(1)では、新出文法項目を意図的に入れた small talk のような形式で教師が生徒を巻き込みながら(インタラクションをしながら)進めていく。FFIの暗示的な指導法の1つである input enhancement(「インプット強化」という手法をここで活かせる(図1参照)。つまり、ターゲットになる文法項目を意図的に使いながら、話し方に強弱をつけたり、視覚教材等でハイライトして示したりしながら、その表現の意味を推測させていくのである。(2)は従来の指導でも行われてきたものであるが、絵や写真を見せながら英文を言えるように練習するといった方法が一般的だ。

(3)では、前述したように、コンテキスト(文脈)の中で文法を使わせるコミュニケーション型練習(form-focused practice)を想定している。(4)は今回、実践例の紹介は割愛するが、より自由度の高いコミュニケーション型言語活動(スピーチ、プレゼンテーション、ディスカッション、ライティングなど)を行うことで、練習した文法を別の文脈で用いる機会を与える。

本稿では(3)の練習方法の例を以下で紹介する。今回は、仮定法の指導を行うものとする。

練習1：Find Someone Who

この活動は、クラスメイトに質問をして、図2の各項目に当てはまる人がだれかを探すものである。当てはまる場所に名前を書くだけでなく、中上級者には、More informationの箇所も記入させたいので、会話を継続させ、詳細な情報を引き出すよう事前に指導しておく。まずは教師がALTまたは生徒とモデルを見せたあと、全員で項目の情報を用いた英文を言う練習を行う。その後、ペアで一度行われたあと、教室を自由に動き回らせ、制限時間内(10分程度)でできるだけ多くの人と会話するよう指示する。活動後は、教師が数名の生徒に聞いた情報を全体に共有したり、補足説明を行ったりする。様々な文法項目で実施可能であるので、Warm upも兼ねての活動としてお勧めしたい。

Find Someone Who

Key sentence:

If you had 100 million yen, what would you do? (もし1億円あったら、何をする?)

Find someone who...

What would you do?	Name	More information
... would buy a gorgeous apartment.		
... would travel all over the world.		
... would marry a very handsome prince.		
... would play with her friends every day.		
... would eat very delicious meal at a famous French restaurant.		
... would go to Disneyland very frequently.		
... would wear a luxurious dress.		
... would go to Arashi's concert.		
... would ()		

図2 Find Someone Who ハンドアウト

練習2：すらすら英会話

瀧沢(2013)を基に、筆者が英文などをアレンジして作成したペアでの会話練習である。まず机を向かい合わせ、ペアを作り、じゃんけんさせる。勝った生徒は図3のハンドアウトの左側を、負けた生徒は右側を読む担当になる。制限時間内でハンドアウトを用いて会話させ、時間になったら生徒が座る席をずらしてペアを変えていく。最初は40秒程度(変更は可能)でハンドアウトを読み切ることからスタートし、慣れてきたら、ジャンケンで負けた人はハンドアウトを見ずに自分の答えを言う、さらには、勝った人はランダムに質問を選んで聞ける、負けた人は2~3文で答えなくてはならない、など負荷をかけていくことも可能である。この活動は実際に筆者が博士論文のデータ収集をさせていただいた高等学校や、前勤務校の大学でも実施したが、高校生と大学生からは非常に好評だった活動である。文法を様々な文脈で即興で言う練習にもなるうえ、学習者が多くの人と会話することができるので、人間関係が円滑になるという利点もある。特に高等学校で実施した際は、クラス内でのエンカウンター的な役目にもなったようだった。授業の最初の帯活動としてわずか10~15分程度であるが、継続していくことで大きな効果が現れる活動である。

Mr. Oba's
 すらすら英会話
 - 仮定法を使ったすらすら英会話 -

- | | |
|--|--|
| <ol style="list-style-type: none"> Hi, how are you? Would you be nervous if you met a famous person, such as Ed Sheeran? If you won 100 million yen in the lottery, what would you do? What would you do if Japan were attacked by foreign arms? Do you think you would have passed the exam if you studied harder? If Covid-19 hadn't happened, what could you have done? Did the coach support your team in the game? Oh, it's rainy today! We can't go on a picnic. I missed the bus! I can't arrive there on time. If you were to die tomorrow, what would you do today? Thanks, have a nice day! | <ol style="list-style-type: none"> I'm good. And you? Yes. I would definitely be nervous if I met Ed Sheeran. If I won 100 million yen in the lottery, I would travel around the world. I would run away abroad immediately if Japan were attacked by foreign arms. Yes, I do. I wish I had started preparing for the exam earlier. I could have studied abroad if Covid-19 hadn't happened. Yes. Without his support, our team would not have won the game. I wish it would stop raining! If only you had left your house much earlier! I would visit my favorite restaurants with my family if I was to die tomorrow. Likewise. |
|--|--|

図3 すらすら英会話 ハンドアウト
 (宮川幸久・林龍次郎編(2016)を参照)

練習3：スキット

この活動では図4のようなモデル・ダイアローグ(スキット)をまず提示し、内容や仮定法がどのように使用されているか確認する(下線部が仮定法)。

- <Model skit>
- A: Hi John.
 B: Hi Alan. How is it going?
 A: So so... I feel very nervous about the math test. I am too busy to prepare for the test.
 B: Really? It seems you have a lot of free time. If I were you, I would stop using your smartphone.
 A: No kidding! Without my phone, I would not be able to concentrate on studying.
 B: Why? If you had stopped using your phone earlier, you could have prepared for the test better.
 A: Umm... Ok, I will try anyway.
 B: Should you have any questions about math, don't hesitate to ask me.
 A: Many thanks!!

図4 モデルスキット

次にペアを作り、図5のようなモデルの一部を残したテンプレートを配布し、オリジナルのダイアローグを作成する。今回はあらかじめ練習させたい表現である仮定法を組み込んであり、オリジナルの文脈を作らせる。練習させたい表現がある場合は、このようにあらかじめダイアローグに組み込んでおくとよい。

- A: Hi
- B: Hi How is it going?
- A: So so... I
- B: Really? It seems
- If I were you, I would
- A: No kidding! Without, I would not
- B: If you
- A:
- B: Should you have any questions about, don't hesitate to ask me.
- A: Many thanks!!

図5 オリジナルスキット用テンプレート

原稿完成後、ペアで読む練習をさせ、時間が許す限

り、多くのペアに前に出て全員の前で発表してもらう。この活動は、原稿を作成する際に協働でライティングを行う機会を与えることになり、生徒たちは楽しみながら創造的なダイアローグを作成していた。文脈を創造するという活動は学習者にとって楽しみながら行える有意義な活動であると思われる。

5. 最後に

本稿では、第二言語習得論研究に基づく英文法指導の考え方や理論を概観し、教室で実践可能な練習メニューを紹介した。文法指導には、文脈による提示(導入)を行ったうえで、学習者の理解を助けるための明示的な説明やフィードバックが有効であるが、繰り返し有意味の練習を行っていくことがさらに重要である。機会的なドリルの反復ではなく、ゴールを見据えた目的意識がある練習を行わせることで、学習者も練習の必要性を実感しながら取り組むであろうし、その積み重ねが文法知識を運用できるレベルに引き上げてくれるだろう。生徒が楽しみながら達成感を感じられるような文法練習をぜひ日々の授業に取り入れてみてはどうだろうか。

参考文献

- DeKeyser, R. M. (2015). Skill acquisition theory. In B. VanPatten & J. Williams (Eds.), *Theories in second language acquisition: An introduction* (2nd ed., pp.94-112). New York, NY: Routledge.
- Lightbown, P. M. (2013). Transfer appropriate processing. In P. Robinson (Ed.), *The Routledge encyclopedia of second language acquisition* (pp.652-655). New York, NY: Routledge.
- Loewen, S. (2022). 『学びの場での第二言語習得論』(佐野富士子ほか訳) 開拓社
- 瀧沢広人(2013). 『中学生のためのすらすら英会話100』 明治図書出版
- 宮川幸久・林龍次郎編(2016). 『[要点明快] アルファ英文法 新装版』 研究社
- (横浜国立大学教育学部英語教育講座 専任講師)